



Title	大阪方言における文末詞デの用法とイントネーション
Author(s)	南, 早葵
Citation	阪大社会言語学研究ノート. 2022, 18, p. 71-97
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/86406
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

大阪方言における文末詞デの用法とイントネーション

南 早葵

【要旨】

本稿では、大阪方言における文末詞デを対象に、文末のイントネーションの違いに注目し、その文法的意味や用法を記述した。大阪方言のデは基本的に低接のアクセントをもち、強調型上昇調・疑問型上昇調・無音調・平坦調の4つのイントネーションをとる。また例外的に高接のアクセントをとるデも存在する。これらを上昇調(強調型上昇調および平坦調・高接・疑問型上昇調)と無音調とに大別すると、上昇調のデは聞き手からの反応を前提としており、対話性が強い一方、無音調のデは聞き手からの反応を強く期待しているわけではなく、対話性が弱い。また、上昇調は、イントネーション自体が聞き手に伝えたい・聞き手からの反応を求める等の用法を持っているが、無音調は特別な音調をとらない場合を指す。このことからイントネーションによる影響を受けない無音調のデの用法がデの文法的意味と一致すると指摘し、デは「話し手にとって命題が自明であることを述べる」ために使用される形式であることを明らかにした。

【キーワード】大阪方言、文末詞、イントネーション、対話性

1. はじめに

大阪方言には次のように文末において用いられる「デ」が存在する(本稿で大阪方言における文末の「デ」について言及する際には、引用の場合を除き「デ」と表記する)。

(1) 雨降ってきたデ。

増井(2018)において、「で(助詞):共通語の終助詞ヨにあたる。ヨに比べて、柔らかい表現になる。」(p.211)と説明されている通り、一般にデは標準語¹⁾における終助詞「よ」に当たるとされる。しかし、標準語と方言は一対一対応と言い切ることとはできず、デは単に「よ」相当というだけでは不十分である。このことをふまえ、より具体的にデの文法的意味について記述したものとして野間(2011)が挙げられる(詳細は2.1節参照)。野間は、同じく「よ」相当とされることのある方言文末詞の「ワ」と対照させて「デ」の特徴を記述している。

野間の記述は概ね筆者の内省とも合致するものであるが、イントネーションによる用法

1) 『日本語学大辞典』(東京堂出版, 2018)によると、共通語は「異なる母国語としている人たちの間で共通に使われている言語、(中略)現実に全国で話されている言語(形式)」である一方、標準語は「国や地域に多様な言語が行われている時、行政・教育あるいは商業活動などの必要から、公用語として選ばれる標準語的な言語」、また「書きことばに視点を置いた概念」であることから、規範としてより洗練された言語形式であるという意味も込めて、本稿の筆者の用語としては「標準語」という表現を用いることとする。

の違いが扱われていない。デは当該方言においてよく用いられる文末詞²⁾であるが、日常会話の中では、イントネーションによってさまざまな意味が付加される³⁾。

(2) (電源を押してもテレビがつかず)

a. なあ、このテレビ[壊れてん]デ[[一。いつからつけてないん？

b. テレビ[壊れてん]デ。修理頼まなあかんやん。

(2a) の上昇するデの場合、「テレビがつかないことを聞き手が知らない」ことを非難するようなニュアンスがある。しかしデが上昇しない (2b) においては非難のニュアンスがなく、テレビがつかないという事実から「テレビが壊れている」と話し手が認識していることを表明している。そもそもデがなくても「このテレビが壊れている」という情報を聞き手に伝えることは可能である。しかし、デの有無もしくはデが伴うイントネーションによって、話し手の伝達態度やニュアンス、対話性に違いが生じる。

以上をふまえ、本稿は、デのもつイントネーションの観点から大阪方言における文末詞デについて記述することを目的とするものである。記述は筆者 (1998 年生、大阪府茨木市出身、外住歴無) の内省をもとに行う。

本論文の構成は以下の通りである。まず 2 節で先行研究と問題のありかについて述べる。そして 3 節でデの形態的特徴について確認する。次に 4 節で、デのアクセントとイントネーションについて記述し、5 節でイントネーションごとのデの用法を記述する。続く 6 節で文末詞デの文法的意味を明らかにし、最後に 7 節でまとめを述べる。

2. 先行研究と問題のありか

本節では、まず 2.1 節で文末詞デについての先行研究を示し、次に 2.2 節でイントネーションを絡めて文末詞・終助詞の意味を記述した先行研究を示す。最後に 2.3 節で問題のありかと本研究の目的を提示する。

2.1. 文末詞デについて

まず、文末詞デの地理的分布についてみる。国立国語研究所による『方言文法全国地図第 4 集』第 166 図 (「今、お前のところに車は無いだろう?」と聞かれて)「(いや、) 有るよ」と答えるときの言い方によると、「あるで(一)」という回答が大阪府・京都府・滋賀県・兵庫県・三重県の近畿地方を中心に見られたほか、鳥取・島根・岡山・広島中国地方や大分県の数地点にも分布している。このことから文末詞デは西日本での使用が多く、特に近畿

2) 藤原 (1972) は文末にあって最終的に文の表現効果を決定するものを「文末詞」としており、方言研究の第一着眼点としている。本稿は大阪方言の研究であるということも踏まえて「文末詞」という表現を用いたい。また先行研究などに言及する際に「終助詞」という名称を用いることもあるが、これは原文のものである。

3) 例文中のピッチの表記は沖 (2017) に倣い、ピッチの上昇する位置を [、ピッチの下降する位置を] で表す。また、[[はより高いピッチであることを示す (イントネーションの表記に関する詳細は 4 節参照)。なおピッチの表記は、文末の「デ」の音調に関わる部分のみに付す。

地方での使用が盛んであるといえる。

また、文末詞デについては近畿方言の概説書である榎垣編（1962）・飯豊ほか編（1998）や、大阪方言の概説書である郡編（1997）、さらに牧村編（2004）などに記載がある。特に榎垣編（1962）や飯豊ほか編（1998）の各地域に関する記述では、[z] > [d] の音変化によってゼから変化したデが近畿全域で使用されることが述べられている。それらによるデ（ゼ）についての記述を抜粋して示すと以下ようになる。

(3) 近畿各地の方言におけるデ（ゼ）

- i. 強意断定をあらわす。 (滋賀県方言 榎垣編 1962: 212)
- ii. 念を押す強めに使われる (奈良県方言 榎垣編 1962: 355)
- iii. 告知表現として使う。 (滋賀県方言 飯豊ほか編 1998: 82)
- iv. いわゆる告知の表現。(中略) デ／ゼの方が、ド／ゾよりも、やや丁寧な感じをもつ。しかし、エは、デ／ゼよりももっと丁寧な感じであり、完全に女性語的性格を保っている。 (京都府方言 榎垣編 1962: 295-296)
- v. 自己の見聞、意思をつよく指示し主張するのに用いる。(中略) デはドより品位が高い。 (大阪府方言 飯豊ほか編 1998: 227)
- vi. 東京の「よ」「ぜ」にあたる。宣言するときや相手に教えたり諭すときに、男女とも使う。 (大阪府方言 郡編 1997: 53)
- vii. デはドの女性用語 (兵庫県方言 榎垣編 1962: 553)

また、牧村編（2004）によると、そもそもデは「ゾエ→ゼ→デと変わったもの」(p.454)であり、デは「ぞえ」に由来する。その「ぞえ」については『日本国語大辞典 第八巻』（小学館，2001）に「終助詞の「ぞ」と「え」が重なったもので（中略）念を押すのに用いられる」(p.346)とある。これらのことから、デ（ゼ）は話し手の主張を強く示す役割を持ち、また同様の役割を持つド（ゾ）より待遇度が高いということが明らかにされている。しかし、文末詞デの具体的な意味や用法についての詳細な記述はなされていない。

さらに、1節でも触れたように文末詞デは「よ」相当と言われるが、常に「よ」と交替できるわけではない。こうしたことをふまえ、野間（2011）は大阪方言の文末詞デの文法的意味ついて、同じく「よ」相当とされるワと対照させながら記述している。それによると、デの形式的特徴としては前接語の品詞に制約がなく、名詞および形容動詞に後接する場合はコピュラのヤを介すると説明されている。また他の文末詞を後接せず、使用可能な文タイプは平叙文のみで疑問文や命令文では使えないと記述されている。さらに野間は、デの意味機能を考察しており、基本的な意味として以下の2点にまとめている。

(4) デは、

- a. 当該命題の内容が話し手にとって「自明」のことであり、
- b. それは聞き手が認識すべきものである

ということを表す形式である。

(野間 2011: 32)

ここでいう「自明」とは、発話時よりも前に知っていたり、認識していたりして、思い出したり考えなおしたりする必要がないという意味である。デの基本的な機能は、聞き手が認識すべき（と話し手が思っている）情報を聞き手に届けるということであり、「聞き手に

何らかのアクションを起こさせる」「聞き手の思い込みを正させる」というのは、デそのものが持つ機能ではなく、デを使用することによって生じる語用論的なニュアンスであると説明している。

また、デが使えないのは、大きく分けて①独り言、②話し手がある場で考えたことや決めたことを述べる、③ナラティブにおける状況説明、の3つの場合だとしている（例文(5)～(7)）。なお用例における「#」は文脈的に不適格であることを示している。

(5) #あー、しんどいデ。 (①独り言)

(6) A: 俺は焼き飯にするけど、おまえどうする？

B: #えーっと、じゃあ俺は天津飯にするデ。

(②話し手がある場で考えたことや決めたこと)

(7) #あんなー、こないだうちの大学の卒業式があったんやデ。それでなんかゴレンジャーみたいなやつ着てるやつらがおったデ。 (③ナラティブにおける状況説明)

((5)～(7)は野間 2011: 37-38 から引用)

①に関しては、デは聞き手目当て専用の文末詞であり、聞き手に伝えることを目的としない発話、つまり独り言では使えないと述べられている。②は、「命題内容が話し手にとって「自明」のこと」という特徴に反する場合のことである。③については、話し手が自分の体験や感想を述べるナラティブの冒頭では、聞き手との共有知識や共有体験をつくるために話し手がターンを維持して話を続けようとしているからデは使用されないと説明している。

2.2. 文末イントネーションと文末詞

文末詞（または終助詞）研究のなかには、文末におけるイントネーションの違いをみながらその特質を描こうとしているものがある。例として井上(1993)や沖(2017)、上林(2020)などが挙げられる。

井上(1993)は、終助詞およびイントネーションの観点から命令文の類型を考えられるとしており、次掲のように例示している。以下、「よ H」は高くあるいは上昇調で、「よ L」は低くあるいは下降調で発音される「よ」を表している。

(8) (写真をとる時に)

a. はい、写真とるから、動かないで (よ H/ね)。

b. ちょっと。写真をとるんだから、動かないで (よ L)。

(9) (締切日の翌日にレポートを提出しに来た学生に)

困りますねえ。ちゃんと昨日のうちにレポートを出してください

(よ L/??よ H/??ね)。

((8)(9)は井上 1993: 336-337 から引用)

(8b)には「聞き手が動いた(動こうとしている)」という、話し手の意向に反する状況が存在することに対する「異議申し立て」というニュアンスがあるが、(8a)は単に「発話時以降動くことがない」ように聞き手の注意をうながすだけの文であり、話し手の意向に反する状況が存在することを特に前提としない。(9)の命令文で言及されているのは「昨日のうちにレポートを出す」という「発話時以前に実行すべきだったのに結局実行されなかつ

た」ことがらである。「よ」と文末のイントネーションからこのような現象が観察されることから、井上は命令文の機能の類型を考えるにあたって 2 つの視点が必要であるとしている。それは「現在動作実行のタイミングにあるかないか」を前提に発するという「タイミング考慮・タイミング非考慮」、「話し手側の考えと矛盾することがらが存在するかしないか」を前提に発するという「矛盾考慮・矛盾非考慮」の視点である。また、この視点が命令文以外の文（勧誘文やテンス・アスペクトの問題）の意味用法を考える上でも有効性があると述べている。

次に、沖（2017）は長野県松本方言の終助詞を文末イントネーションの観点から記述している。沖がまず指摘したのは、終助詞によってとり得るイントネーションが異なることである。さらに、上昇調イントネーションをとる場合に〔質問〕の談話的意味が生じる終助詞文の終助詞は、話し手の〈判断〉を文法的意味として担っていると指摘し、当該終助詞を「判断終助詞」と名付けている。同様に上昇調イントネーションをとる場合に〔押付〕の談話的意味が生じる終助詞文の終助詞は、話し手の〈意図の通知〉を文法的意味として担っていると、当該終助詞を「通知終助詞」と名付けている。

また、上林（2020）は関西方言における終助詞ゾの機能について、ゾがとり得るイントネーションの観点から記述している。まず、ゾの基本的な機能として、話し手が事態や状況に対して何らかの疑わしさを持っていることを示す、すなわち「訝り」を表示するはたらきが根底にあるとしている。さらに訝りの感情の表示を基調としながら、ゾがつく文が疑問上昇調・強調上昇調・平調の 3 つのイントネーションをとり得ることを示し、それぞれのイントネーションにおけるはたらきや対話性に次のような違いが見られると指摘している。すなわち、疑問上昇調のゾは事態内容に対する話し手の訝りの感情を示すもので対話的性質が弱く、強調上昇調や平坦調のゾは聞き手の認識や態度への訝りを示すもので聞き手へ認識変更をはたらきかけるという点において対話的性質が強いという。

以上のように、文末のイントネーションのあり方を観点とし、終助詞を含む文、あるいは終助詞自体が持つ文法的意味について記述する研究が行われている。

2.3. 問題のありか

2.1 節で述べたように、デを対象として具体的な研究を行った論文は野間（2011）以外には見当たらなかった。野間（2011）の指摘するデの主たる意味機能は筆者の内省とも概ね合致するが、野間は文末イントネーションの違いがもたらすデの用法の違いについてはほとんど言及していない。というのも、イントネーションの違いによらず、デが共通してもっている意味を探るという立場に立っているためである。同論文ではデとワの対照を中心に据えており、イントネーションについては、独り言の場合にデが下降調イントネーションをとることに触れているのみで⁴⁾、原則として「デ＋上昇調」のケースだけを記述の対象にしている。しかし、次に挙げるように、デの取るイントネーションによって用法が異なるケース

4) 2.1 節で「デが使えない場合」として野間が「①独り言」を挙げていることをみたが、これは上昇調のイントネーションを伴うデについての制約である。

がある（(10a) (10b)）。

(10) a. あの子、今日しんど[そ]うやデ[[一。

b. あの子、今日しんど[そ]うやデ。

(10a) はデの拍を伸ばしながら上昇するもので、聞き手が認識しておくべき（と話し手が思っている）命題内容を聞き手が知らないことを非難するニュアンスがあると解釈できるが、文末の上昇がない（10b）では聞き手を非難してはおらず、命題内容に対する話し手の認識を示している（詳細は 5.2 節参照）。したがって、上昇しないデが、野間の言うデの基本的な意味のうちの「それは聞き手が認識するべきものである」（4b）ということを表すといえるかどうか、はっきりしないように思われる。

このことをふまえると、デの用法の記述においてイントネーションを無視することではできないと考えられる。また 2.2 節でも触れたように、最近の研究のなかに、イントネーションの違いをみながら終助詞の特質を描こうとしているものがあり、これらは終助詞の意味記述をより精緻なものにすることに成功しているといえる。このことから文末詞の記述にはイントネーションの観点を加える必要があると考える。具体的には、(10a) と (10b) の用法上の違いを捉えること、デのとりうるイントネーションとそれぞれの用法を詳細に記述すること、これが本研究の目的である。

以下、例文は記載がない限りは筆者の作例とし、大阪方言の表記に関しては、議論の中心となる文末のデの部分のみをカタカナで表記することとする。

3. 文末詞デの形態的特徴

デとイントネーションについての具体的な記述に入る前に、デの形態的な特徴について野間（2011）の記述を参照しつつ整理しておく。本節では、デの生起環境、デの使われる文タイプ、他の終助詞との共起関係の順に確認し、適宜、野間が指摘していない点や筆者の内省と一致しない点についても述べる。また、以下の用例における「*」は文法的に不適格であることを示す。

まず生起環境について、デは動詞、形容詞、形容動詞、名詞に接続可能であると野間（2011）は示しているが、さらに準体助詞ノ・ンやノダ相当のネン・テンなどにも接続可能である。ただし、形容動詞、名詞と同様に準体助詞に後接する際はコピュラのヤを介する。

- | | |
|------------------------------|----------|
| (11) もう寝るデ。 | 【動詞】 |
| (12) 外寒いデ。 | 【形容詞】 |
| (13) 今日は珍しく静かやデ。 | 【形容動詞】 |
| (14) 明日は雨やデ。 | 【名詞】 |
| (15) そのくつ、私の（ん）やデ。 | 【準体助詞】 |
| (16) 洗濯物干しとくねんデ。わかった？ | 【ノダ相当形式】 |
| (17) 電話かけてこんといてや。今、模試受けててんデ。 | 【ノダ相当形式】 |

（(11) ～ (14) は野間 2011 より引用）

また、野間は言及していないが、次掲のように感動詞「ありがとう」と「ごめん」にはコピュラのヤを介することで接続可能となる。

(18) ごめんやデ。

(19) ありがとうやデ。

ただし感動詞全般に接続可能というわけではなく、このような使い方ができるのは「ごめん」、「ありがとう」の2つのみである。

(20) *さようならやデ。

また、デは主節末のみに生起し、従属節内には現れない。

(21) 明日は雨やデ。洗濯物干せへんな。

(22) *明日は雨やデから、洗濯物干せへんな。

文タイプに関して、デは平叙文の場合のみ使用される文末詞である。野間は平叙文・疑問文・勧誘文・命令文におけるデの適格性について述べているが、ここでは他の文タイプについても挙げておく。

(23) 俺、学校行くデ。

【平叙文】

(24) *あんた、今日学校行くデ？

【真偽疑問文】

(25) *誰が学校行くデ？

【疑問詞疑問文】

(26) *私も学校行こうデ。⁵⁾

【意志文】

(27) *一緒に帰ろうデ。

【勧誘文】

(28) *さっさと学校行けデ。

【命令文】

(29) *学校行くなデ。

【禁止文】

(30) *そろそろ、田中さん学校行くやろうデ。

【推量文】

推量文として(30)のように「やろう(だろう)」に接続することはできないが、次掲(31)のように、認識のモダリティ形式である「らしい」や「かもしれへん(かもしれない)」等には接続可能である。

(31) 今日は田中さん学校行く {らしい／かもしれへん} デ。

また共起関係に関して野間は、デは他の文末詞と共起しないと述べている。筆者の内省でも同様である。

(32) 俺、昨日学校行った {*わ/*な/*よ/*ね} デ {*わ/*な/*よ/*ね}。

丁寧体について、筆者の内省では、「です」に後接することはないが「ます」には後接可能である。

(33) *今日が誕生日ですデ。

(34) これ、やっときますデ。(「これ、(わたしが) やっておきますよ」の意)

郡編(1997)は「丁寧体の『マス・デス』には『デ』はつけられないが、『マッセ』『デッセ』でその意味を表すか(主に高年)、共通語式に『ヨ』を使う」(p.53)と述べている。しかし、現在の若年層は「マッセ・デッセ」を使用せず、丁寧体では「ますよ・ですよ」を使用する。(34)のような「ますデ」の形は、標準語形の「ますよ」の「よ」を方言に置き換

5) 意志文や勧誘文においてもデを接続させる(中高年層による)発話を耳にすることもあるが、筆者自身はそのような使用をすることがなく、内省も及ばないため、ここでは不適格としている。

えることで形成されたのではないかと思われる。「ですデ」が許容されない理由についてははっきりしたことが言えないが、「で」という同じ音が繰り返し現れることを避けている可能性もあるように思われる。あるいは意味的な問題ということもあるかもしれないが、本稿では現象の指摘に留める。

4. 文末詞デのアクセントとイントネーション

本節では、デが持つアクセントやデがとり得るイントネーションについて記述する。

まずアクセントについて、大阪方言のアクセントとして郡編（1997）は高い音で始まる「高起式」と低い音で始まる「低起式」の2つを挙げている。そして、高起式・低起式の両方に、アクセントの下がり目を持つ有核語と、下がり目を持たない無核語がある。また轟木（2008）によると、終助詞のアクセントには、「順接」と「低接」の2種類がある。順接は前接語のアクセント型に従って接続するもので、低接は前接語のアクセント型に関係なく低い拍で接続するものである。ただし、前接語が有核語の場合、低接であっても前接語の末尾拍より低くなることはない。

これらをふまえ、平叙文につくデを例にとると、前接語との基本的な接続は次のようになる。以下では高起式・低起式それぞれの例を挙げる⁶⁾。

- (35) a. [お]るデ。 (高起式有核語)
- b. [いく]デ。 (高起式無核語)
- c. あ[る]デ。 (低起式無核語)

(35)のように、デは前接語のアクセント型を問わず低いピッチで接続する。したがってデは低接のアクセントを持つと言える。

次にイントネーションについてであるが、郡（2015；2020）の枠組みを参考にすると⁷⁾、デがとり得るイントネーションには強調型上昇調、疑問型上昇調、無音調、平坦調の4つが考えられる。郡にならい、音声分析ソフトウェア（praat）での分析結果を図1～図5として示しておく。

まず強調型上昇調について、郡は、本来強調型上昇調は前接語に比べて一段高く言おうとするものであるが、直前に下降する動きがある場合は上昇開始が遅れて末尾拍の内部から上昇すると述べている。先述のとおりデは低接のアクセントをもつため、末尾拍は前接語より低くなる。そのため、強調型上昇調では上昇開始が遅れて、デの拍内で上昇する（図1）。

6) (35)では低起式有核語の例は省略している。大阪方言の動詞には低起式有核語のものがなく、また名詞や形容動詞の場合には低接のアクセントをもつコピュラのヤを介してしかデが接続しない（したがって全体としては(35a)と同様のアクセントパターンになる）。なお注3でも触れたが、ピッチの表記は沖（2017）に倣い、ピッチの上昇する位置を「」、ピッチの下降する位置を「」で表す。また、「」はより高いピッチであることを示す。

7) 郡の枠組みを参考にするのは、郡が「無音調」という音調のタイプを設けていることによる。野間（2011）は基本的に上昇調のデの意味用法について記述しているが、デの中心的な意味を論じるには、イントネーションの影響を受けない無音調のデについて考えるべきだというのが筆者の立場である。

- (36) 【強調型上昇調】 a. [お]るデ[(ー)。 (高起式有核語)
 b. [いく]デ[(ー)。 (高起式無核語)
 c. あ[る]デ[(ー)。 (低起式無核語)

これに対して疑問型上昇調のデは、前接する語句に低接しつつ、強調型上昇調より比較的長い時間をかけて拍を伸ばしながら漸次的に上昇する音調である (図 2)。

- (37) 【疑問型上昇調】 a. [お]るデ[[ー。 (高起式有核語)
 b. [いく]デ[[ー。 (高起式無核語)
 c. あ[る]デ[[ー。 (低起式無核語)

デは低接のアクセントを持っていることから、さらに下降する音調を取ることができない。よって、聞こえとしては下降調を伴っているように思われるデは、下降しているのではなく低接のアクセントがそのまま現れていると言える (図 3)。郡は、語が持つアクセントがそのまま実現され、特別な音調をとらないイントネーションのことを「無音調」と呼んでいる。なお、無音調のデが長音化する場合もある。

- (38) 【無音調】 a. [お]るデ(ー)。 (高起式有核語)
 b. [いく]デ(ー)。 (高起式無核語)
 c. あ[る]デ(ー)。 (低起式無核語)

郡 (2015 ; 2020) でも平坦調は強調型上昇調の変種とされているが、デが平坦調をとる場合、強調型上昇調と似た接続の仕方になる。デの平坦調は前接語句に低接しつつ少し上昇するが、強調型上昇調や疑問型上昇調に比べると上昇の幅が狭く、そのまま長音化するものである (図 4)。(39) では上昇の程度が弱いことを (l) で示している。

- (39) 【平坦調】 a. [お]るデ (l) ー。 (高起式有核語)
 b. [いく]デ (l) ー。 (高起式無核語)
 c. あ[る]デ (l) ー。 (低起式無核語)

ここまで、低接のアクセントを持つデがとり得るイントネーションについてみた。しかし例外的な接続をするデも存在する。デは (35) で示したように基本的に低接のアクセントをとるが、例外的に、直前の前接語のアクセント型によらず、接続開始時点から高いピッチで接続するものもある (例 (40)、図 5)。本稿では暫定的に、この例外的なデについて轟木 (2008) で検討されている「高接」のタイプをとるデとしておく。

- (40) 【高接】 a. [お]る[デ。 (高起式有核語)
 b. [いく]デ。 (高起式無核語)
 c. あ[る]デ。 (低起式無核語)

高接する場合、デは先に挙げたいずれのイントネーションパターンもとらず、高いピッチが実現されるだけである。このことから、高接自体が一つのイントネーションパターンであると考え、本稿では高接を、上述した 4 つのイントネーションと同等に扱うこととする。

以上、本節では、デのとりうるイントネーションとして、強調型上昇調、疑問型上昇調、無音調、平坦調に加え、高接のイントネーションがあることを示した。

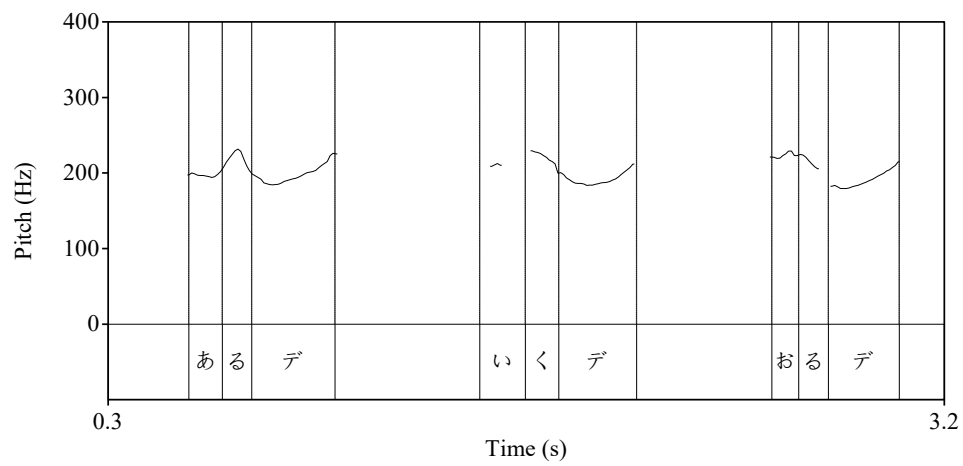


図 1 【強調型上昇調のデ】

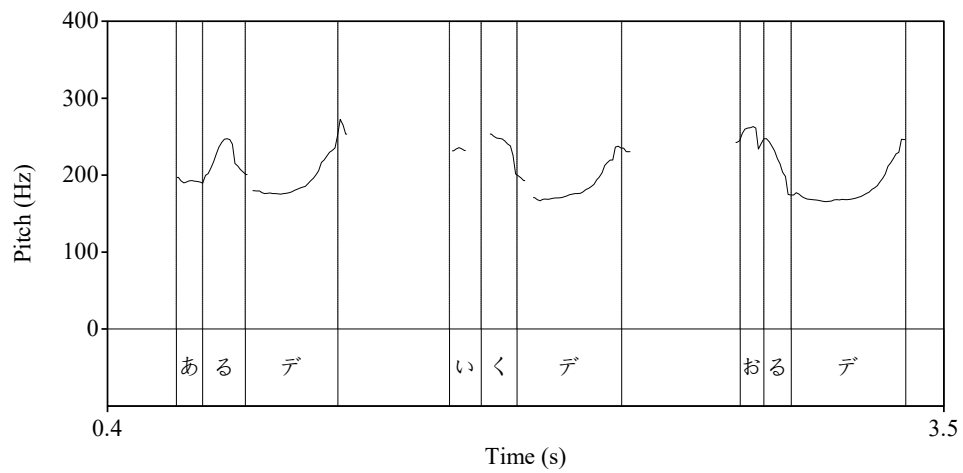


図 2 【疑問型上昇調のデ】

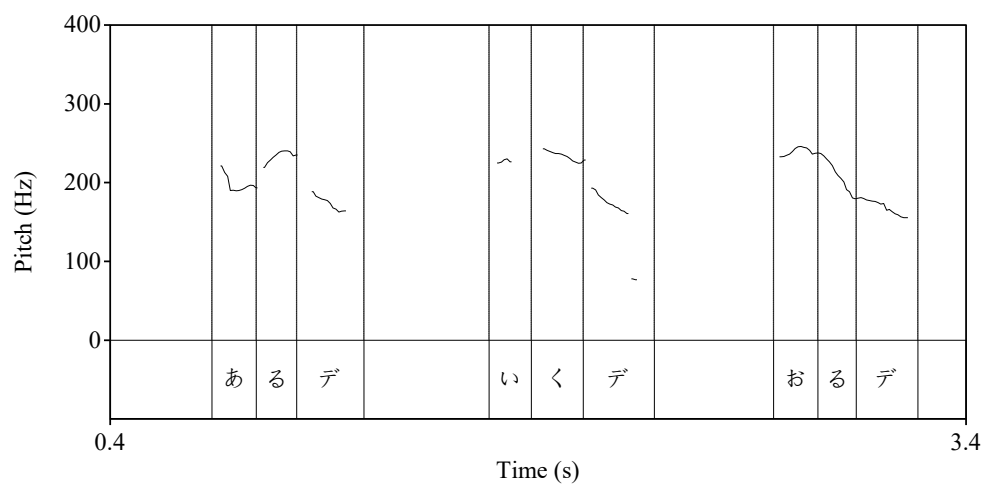


図 3 【無音調のデ】

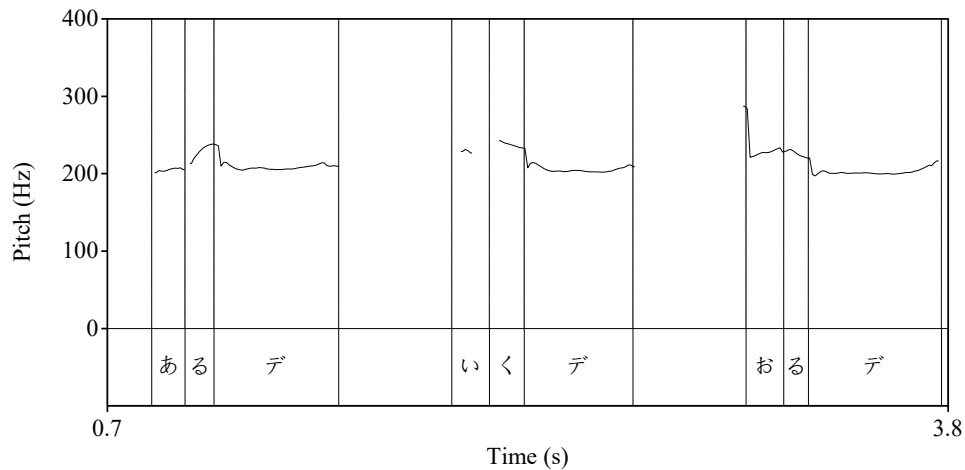


図4 【平坦調のデ】

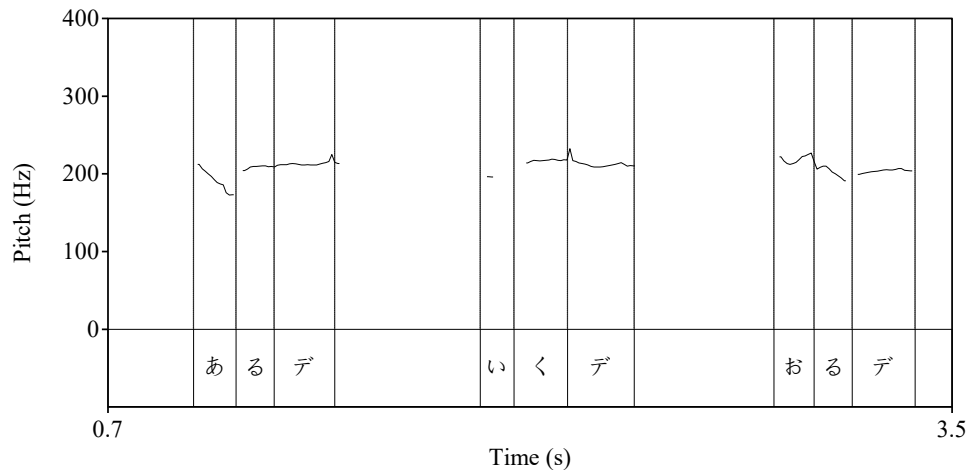


図5 【高接のデ】

5. イントネーションからみた文末詞デの用法

本節では、文末詞デについてイントネーションごとの用法を記述する。4節でも述べたようにデは基本的に低接のアクセントを持ち、強調型上昇調、疑問型上昇調、無音調、平坦調の4つのイントネーションをとることが観察される。これに、例外的に高接するデも加えた5パターンにおけるデについて記述していく。また全体としては、デを含む文が上昇調をとるか否かが核となることから、強調型上昇調、高接、疑問型上昇調のデを「上昇調」とまとめて5.1節で扱い、5.2節で無音調、5.3節で平坦調のデについて記述する。

また本節では、2.2節でも挙げた先行研究を参考に記述を行う。具体的には、関西方言の終助詞ゾについて論じている上林(2020)を参考に、デが共起する文を、情報の提示を目的とする「情報系の文」と、話し手や聞き手の行為の実行に関わる「行為系の文」とに大別し、加えて、発話におけるタイミングや前提について記述した井上(1993)の「タイミング考慮」「矛盾考慮」という考え方も取り入れつつ記述する。「タイミング考慮／非考慮」とは「現

在動作実行のタイミングにあるかないか」を発話の前提にするもの、「矛盾考慮／非考慮」とは、「話し手側の考えと矛盾することがらが存在するかしないか」を前提にするものである。

5.1. 上昇調のデ

野間 (2011) は、デを用いた文が上昇調 (本稿における強調型上昇調、高接もしくは疑問型上昇調) をとるものを対象にデの文法的意味について記述している。このことをふまえて、本節ではまず野間が述べたデの意味について確認し、5.1.1 節で強調型上昇調、5.1.2 節で高接、5.1.3 節で疑問型上昇調のデについてみていく。

2.1 節でも述べたが、野間はデの文法的意味を以下のようにまとめている。

(41) デは、

- a. 当該命題の内容が話し手にとって「自明」のことであり、
- b. それは聞き手が認識すべきものである

ということを表す形式である。

((4) 再掲、野間 2011: 32)

そもそも「自明」とは「話し手にとって、発話時よりも前に知っていたり認識していたりして、思い出したり考えなおしたりする必要がない」という意味だと野間は述べている。この点について例を挙げつつ確認しておきたい。なお本節以降の用例における文頭の「??」は場面状況や文脈的にデの使用が不自然であることを示す。

(42) A: その傘誰の?

B: a. これ? 俺のやデ。

b. これ? えー、誰のやっけ。??あ、そうそうこれ俺のやデ。今日、親父から借りてたの忘れてたわ。

(43) A: 今日学校行く?

B: a. 行くデ。

b. うーん、どうしよかな。??休むつもりやったけどやっぱり行くデ。

(42a) (43a) は、ともに命題内容が自明である。(42a) において「傘が自分のものである」ということは話し手にとって明らかであり、(43a) では「今日学校に行く」ということは話し手にとって事前に決めていたことである。しかし、(42b) (43b) はともに命題内容が自明ではない。(42b) では、「その傘が自分のものである」という命題内容について既知ではあるものの一時的に覚えておらず、思い出す必要があったのである。(43b) では、「今日学校に行く」という命題内容に対して悩み、考え直している様子が「どうしよかな」などの発話から読み取れ、悩みながらもその場で決定した命題内容はまだ話し手にとって自明のものになっていないのである。以上のように、「話し手にとって、発話時よりも前に知っていたり認識していたりして、思い出したり考えなおしたりする必要がない」命題内容に対して、すなわち「話し手にとって命題内容が自明である」場合に、文末詞デが使用されるということは筆者も同意見である。「命題内容が話し手にとって自明である」という話し手の認識のあり方を表明する役割を、デが担っているのである。

5.1.1. 強調型上昇調のデ

野間 (2011) の「自明」という考えをふまえると、デを含む文が強調型上昇調をとる場合は、聞き手が知らないだろうという想定のもとと表される「話し手にとって自明の命題内容を、聞き手と共有したい」という話し手の伝達態度から、〔認識変更の要求〕を用法としているとまとめられる。なお、当該命題を聞き手が既に知っていてしかるべきものと話し手は思っておらず、聞き手が命題内容を未知ということに対して話し手は特に矛盾を感じていない。このことから情報系・行為系問わず矛盾非考慮の文でのみ使用され、情報系では「知らせ」、行為系では「勧誘」の役割が強く表れる。また野間が、デは対話的場面で用いられることが多いと述べているように、強調型上昇調のデは聞き手が存在している場面でのみ使用され、他の音調のデと比べると最も対話性が強い。なお、本節以降「対話性」という表現を用いるが、これは聞き手へのはたらきかけの度合いという意味ではなく聞き手の存在の有無を示している。

次掲のように情報系の文における強調型上昇調のデは、命題内容が話し手にとっては自明であるからこそ聞き手にもその情報を共有したいという「知らせ」の役割を示している。

(44) (外を見ていたら雨が降ってきて、家の中にいる B に向かって)

A: 雨降って[き]たデ[(一)。

【情報系】

B: え、洗濯物取り入れないと!

(44) のデは、「雨が降ってきた」という話し手にとって自明の情報を、聞き手が知らないという想定のもと、だからこそ共有したいという話し手の伝達態度を示している。なお、強調型上昇調のデを使用する際、話し手は命題を聞き手が既に知っていて当然のものだと思っておらず、聞き手が知らないということに対して矛盾を感じない。つまり、強調型上昇調のデは矛盾非考慮であることを前提に使用されるのである。よって次のように、聞き手が既に知っていてしかるべき命題を知らないという矛盾考慮の場合、強調型上昇調は使用されにくい。

(45) (B に向かってお菓子を指して)

1A: これ田中さんの分のお菓子やから、置いといてな。

(B がお菓子を食べてしまい)

2A: え、なんで食べたん? ??田中さんの分やっ[た]んやデ[(一)。 【情報系】

(45) では、A は、聞き手である B に「お菓子を食わずに置いておく」という命題を既に伝えており、聞き手は当該命題を知っていてしかるべきだという前提が生まれる。しかし、聞き手は当該命題を伝えられていたにも関わらずお菓子を食べてしまい、「食べてはいけないと知っていたはずなのに B が食べた」という話し手にとっての矛盾が生じている。言い換えれば、聞き手がきちんと把握していれば起こさないのである行動を起こしたのを認識した話し手が、聞き手は命題内容を認識していないのではないかと考えるに至り、「既に知っていてしかるべき命題を聞き手が知らない」という話し手にとっての矛盾が生じているのである。このような矛盾考慮の文では、強調型上昇調のデは使用されにくく、疑問型上昇調が使用されやすい (詳細は 5.1.3 節参照)。

また矛盾非考慮の情報系の文において、聞き手が曖昧な情報しか知らない場合には、強調型上昇調のデが「知らせ」に加え「訂正」の役割を担う。

(46) (2人で出かけていて)

1A: 今日コンサート行くんやんな? 5時からやっけ?

2B: [6]時からやデ[(-)。

【情報系】

3A: じゃあ、今日は4時で解散しよっか。

(46) では、相手が「コンサートが何時から始まるか」に関して曖昧な情報しか持っていないということを受けて、「コンサートが6時から始まる」という話し手にとって自明の命題内容を相手と共有したいという話し手の心情が表明されている。曖昧な情報、もしくは間違った認識を持っていることを示す2Bの発話に対して、3Aが強調型上昇調のデを使用することによって話し手にとっては自明で正しい情報を提示しており、「知らせ」に加え「訂正」という役割が果たされている。これも話し手にとって自明である情報を聞き手が持っていないからこそ、その情報を共有することによって、情報を持っていない状態からその情報を認識させる「認識変更の要求」によって起きる効果である。

また、強調型上昇調のデでは、これによって命題内容を共有し「認識が変更された」ことで、その情報を得た聞き手が何らかのアクションを起こすことが多い。先に挙げた(44)(46)ともに、聞き手が次のアクションを起こしている。(44)では、「雨が降ってきた」という情報を受け取った聞き手が「洗濯物を取り入れる」と次の行動を起こしている。また(46)では、「コンサートが6時から始まる」という情報を受け取ったことにより、聞き手は「4時に解散しよう」と提案するに至っている。このような、強調型上昇調のデを受けて起こされるアクションも「命題内容が共有される」すなわち「認識が変更された」ことによって起きる副次的な効果である。

続いて行為系の文に強調型上昇調のデがつく場合について考える。行為系の文における強調型上昇調のデは、聞き手が関わらない行為の実行を示す文には使用されにくい、聞き手とともに実行する行為を示す文には「勧誘」と同様の働きを示すものとして使用される。行為系の文では、事前に決定していること、すなわち話し手にとって自明であることを聞き手と共有し、聞き手に対する「認識変更の要求」を行うことで、ともに実行したいという「勧誘」の意図が強くなる。なお聞き手が命題内容を知らないことを前提に発話される点では情報系と同様である。

(47) ??ゴミ出し、私(ら)が[行く]デ[(-)。

【行為系】

(48) 1A: B、ゴミ出し[行く]デ[(-)。

【行為系】

2B: えー、1人で行ってや。

3A: 何言ってんねんな。ほら[行く]デ[(-)。

【行為系】

4B: はーい。

(47) は、話し手自身のみもしくは話し手と第三者の行為の実行について述べるものであるが、この場合は強調型上昇調ではなく疑問型上昇調をとりやすい(詳細は5.1.3節参照)。一方で(48)のように、話し手と聞き手がともに行う行為の実行にかかわる文には強調型上昇調のデがつく。このような違いが生じるのは、情報系の文と同様に、自身にとって自明で

ある命題内容を聞き手と共有したいという話し手の考えを表明していることによると考えられる。話し手と聞き手が共同で行う行為が、聞き手と共有すべき命題内容としてなじみやすいのだと考えられる。そして、行為の実行者が話し手と聞き手の双方であるために、結果として「勧誘」表現としてはたらくのである。

沖 (2017) は、話し手の意志を聞き手に押付け、かつ聞き手が受諾・拒絶・受流しなどの反応を示したときに対話的談話のやりとりのなかで「勧誘」という談話的意味が生じるが、話し手の意志を聞き手に申し渡すものは本来「押付」の談話的意味になる、と述べている。聞き手とともに実行する行為に関する行為系の文では、「勧誘」より強制力の強い「指示」を行うために強調型上昇調のデが使用されることもある (例 (49))。

(49) (道を歩いていて) そこ右[曲が]んデ[(一)。 【行為系】

(49) は、聞き手は目的地への道順を知らないが話し手は知っており、「この交差点では右に曲がる」という行為を指示している。この場合、「勧誘」というより聞き手に押し付ける役割が強くなり、強調型上昇調のデが持つ役割が「指示」にまで及んでいると考えられる。

また、井上 (1993) における、命令文を「現在動作実行のタイミングにあるかないか」を前提に発するという「タイミング考慮」という考えを援用すると、行為系の文の例として挙げた (47) (48) (49) は「現在動作実行のタイミングにある」ことを前提に発せられるものである。対して「現在動作実行のタイミングにない」ことを前提に発せられる場合は、聞き手が関わらない行為の実行に関する文と、聞き手とともに行う行為の実行に関する文の両方で強調型上昇調のデを使用することが可能である。

(50) A: 明日って休み?

B: a. うん。せやから、明日の朝は一緒にゴミ出しに[行く]デ[(一)。 【行為系】

b. うん。せやから、明日の朝は俺(ら)がゴミ出しに[行く]デ[(一)。 【行為系】

先述した通り、聞き手とともに行う行為の実行に関する文における強調型上昇調のデは「勧誘」という役割が強いことから、発話時よりも未来のことがらについての命題内容と相性が良い (50a)。一方で (50b) のように、発話時に動作実行のタイミングにない場合 (タイミング非考慮) で、かつ聞き手が関わらない行為の実行に関する文につく強調型上昇調のデは、情報系の文と同様に「知らせ」の役割が強い。話し手にとって既に決定している「明日の朝ゴミを出しに行く」という命題内容を聞き手に共有するために「知らせ」るものとして強調型上昇調のデが用いられているのである。

ここまで見てきたように、情報系・行為系の文ともに強調型上昇調のデは聞き手が存在している対話的場面で使用され、対話性が強いと言える。聞き手が不在の非対話的場面である独り言では、強調型上昇調のデは使用されにくい。

(51) (独り言で) あれー、ペンどこいったー? ??な[い]デ[(一)。 【情報系】

強調型上昇調のデは、話し手にとっては自明である命題内容を聞き手と共有したいという話し手の伝達態度を表明する。したがって、「認識変更の要求」を求める聞き手が存在しない非対話的場面では不自然になるのである。

また、情報系とも行為系ともとれない、感動詞 (「ありがとう」「ごめん」) にデがつく場

合（3節参照）は、強調型上昇調のみをとる。

(52) {ありがとう／ごめん} やデ[(-)。

【感動詞】

「ありがとうやデ」や「ごめんやデ」は、聞き手（あるいは話し手）の行為が話し手にとって感謝や謝罪の気持ちを抱かせるものであるということを聞き手に伝える際に使われる。そのため、情報を共有したいという伝達態度を持つ強調型上昇調のデと相性が良いのである。強調上昇型のデは、この発話を受けて聞き手が感謝や謝罪を受け入れる（もしくは拒否する）など何らかのアクションを起こすことを求めるような発話となる。

以上をまとめると、強調型上昇調のデの用法は「認識変更の要求」であり、矛盾非考慮であることを前提に使用される。情報系の文・タイミング非考慮の行為系の文では「知らせ」、タイミング考慮の行為系の文では「勧誘」としてのはたらきが強くなる。また対話性という観点から見ると、聞き手不在の非対話的場面（独り言）では使用不可であり、対話性が強いと言える。

5.1.2. 高接のデ

続いて、例外的な接続ではあるが、強調型上昇調・疑問型上昇調と同様に高いピッチを実現する高接のデについてみる。このデは、4節でも述べたように、強調型上昇調の一種と考えられ、類似の性質を持つ。しかし、情報系・行為系を問わず、話し手にとって矛盾が生じている場面、すなわち矛盾考慮の場合に使用される点においては強調型上昇調のデと異なる。また高接のデは「聞き手にとっても自明でしかるべき命題内容を聞き手がきちんと認識しておらず、そのことに対する強い不満を表明する」という、聞き手を詰る・挑発するような役割（無知の糾弾）を持ち、「認識変更の強要」用法を持つといえる。

まず、矛盾考慮の情報系の文における高接のデを観察する。

(53) (外を見ていたら雨が降ってきて、家の中にいる B に向かって)

1A：雨降って[き]たデ[(-)。

【情報系・強調型上昇調】

2B：はい、洗濯物入れるわ。

(しばらくたっても B が動かず)

→ 3A：なあ、雨降って[き]た[デ。なんでまだ動かへんの？

【情報系・高接】

4B：ごめん、やるやる。

(53) では、初めに A が「雨が降ってきた」という命題内容を強調型上昇調で「知らせ」、B は認識変更を要求されたにも関わらずそれに伴うアクション（洗濯物を取り入れる）を起こしていない。よって「B は雨が降っていることを知っているはずであるにも関わらず、取るべきアクションを取っていない」という、A にとって矛盾した状況が生じている。このような矛盾考慮の情報系の文においては「命題内容について既に認識しているべきであるのにきちんと認識していないのはなぜか」という不満を交えた、聞き手が無知であることを糾弾する「無知の糾弾」としての役割が強くなる。また「糾弾」することによって、実際に行動を起こさせるに至っているという点は強調型上昇調と同様であり、かつ強調型上昇調より強く聞き手へはたらきかけている。このような用法を「認識変更の強要」と呼んでおく。

続いて矛盾考慮の行為系の文についてである。

(54) ?? ゴミ出し、私(ら)が[行くデ。 【行為系】 ((43) を改変)

(55) (2人でゴミを出しに行くことが決定している場合)

A: いつまで違ふことしてんねんな。ゴミ出し[行くデ。 【行為系】

B: ごめんどめん、今行く!

(54) (55) のように、矛盾考慮の行為系の場合は、聞き手と共同で行う行為の実行に関する文でしか使用されない。これは、強調型上昇調のデと同様で、聞き手へ次のアクションを起こさせるほどの効果を持つことが理由として挙げられる。また、情報系の文と同様に行為系の文でも「事前に決定していたにも関わらず聞き手がそれを認識していないような行動をしていることが不満である」という話し手による「無知の糾弾」が行われており、聞き手が行動を起こすことを強要している。また、強調型上昇調の「勧誘」と同じく、タイミング考慮・非考慮を問わず、動作実行のタイミングが発話時点でなくても高接のデは使用可能である(例(56))。ただし、聞き手が関わる行為の実行に関する文でなくてはならない(例(57))。

(56) (明日の朝に、2人でゴミを出しに行くことが決定しているが、いつまでたってもBが寝ようとせず)

1A: いつまで起きてんねんな。明日ゴミ出し[行くデ。 【行為系】

2B: 大丈夫やって。まだやることあんねん。

3A: そんなん言っただって、どうせ明日起きてこーへんやろ。

(57) ??明日の朝のゴミ出し、私(ら)が[行くデ。 【行為系】

(56) のように「ゴミを出しに行く」のが発話時点でなくても、「明日ゴミを出しに行くのか?」と挑発するような発話に高接のデが使用されている。明日の朝ゴミを一緒に出しに行くことをきちんと認識しているのであれば、早く寝るべきであるのに、一向に寝ようとしないBに対して、「明日の朝ゴミを出しに行く」という命題内容をきちんと認識していないのではないかと「無知の糾弾」をしつつ挑発しているのである。挑発するという行為は相手に行動を起こさせるために強く働きかけているとも言えることから、聞き手へ行動を起こすよう強要していることになる。このように、聞き手へのはたらきかけの度合いが強調型上昇調よりやや強いという理由で、実行者に聞き手が含まれない行為系の文では使用されないと考えられる。

また、強調型上昇調と同様、聞き手不在の非対話的場面(独り言)では使用されにくい。

(58) (独り言で) あれー、ペンどこいったー? ??な[いデ。【情報系】 ((51) を改変)

以上をまとめると、高接のデの用法は「認識変更の強要」である。矛盾考慮であることを前提に使用され、情報系の文でも為系の文でも「無知の糾弾」というはたらきが表れるが、認識変更を強要させることから派生して起こる効果とみることができる。また対話性という観点から見ると、聞き手不在の非対話的場面(独り言)では使用不可であり、対話性が強いと言える。

5.1.3. 疑問型上昇調のデ

デを含む文が疑問型上昇調をとる場合は、「話し手にとって自明である命題を伝えつつ、

周囲が当該場面状況をどのように認識しているのかわからない、という話し手の不審を表明する」という話し手の伝達態度から、その話し手の認識提示に対する聞き手の〔反応の要求〕を行う用法を持つ。また疑問型上昇調のデは、矛盾考慮・非考慮それぞれの場合ではたらしきが変わる。また、限られた条件下においては非対話的場面でも使用可能なことから、強調型上昇調や高接のデと比べると対話性がやや弱いと言える。

まず情報系の文における疑問型上昇調のデについて見る。特に次のような矛盾考慮の情報系の文では、話し手にとっても聞き手にとっても自明であるはずの命題内容を聞き手がきちんと把握していない、という矛盾が話し手に生じており、だからこそ、場面状況について聞き手がどのように認識しているのかと不審がりながら探る様子を示す。

(59) (外見ていたら雨が降ってきて、中に向かって)

1A: 雨降って[き]たデ[(一)。

【情報系・強調型上昇調】

2B: あ、洗濯物取り入れなあかんなあ。

3A: ごめん、今から出なあかんから願ひするわ。

(帰ってきたらまだ洗濯物が干してあるのが見えて)

→ 4A: なあ、雨降っ[てん]デ[[一。なんでまだ洗濯物外にあんの？

【情報系・疑問型上昇調】

5B: あ、忘れてた。

(59) では、初めに A が「雨が降ってきた」という命題内容を「知らせ」、B は認識変更を要求されたにも関わらずそれに伴うアクション(洗濯物を取り入れる)を起こしていない。よって「B は雨が降っていることを知っているべきであるのに、期待された行為が行われていない」という、A にとっての矛盾が生じている。このような矛盾考慮の情報系の文においては、「命題内容について既に認識しているべきであるのにきちんと認識していないのはなぜか」という、命題内容に関して聞き手が無知であるという様子を非難する「無知の非難」としての役割が強くなる。これも、場面状況について聞き手がどのように認識しているのかわからない、という不審を表明しつつ、聞き手の認識提示などの反応を要求する用法から派生する効果である。また 5.1.2 節で見た「無知の糾弾」との違いは、聞き手の行動を求めるものではないという点にある。「糾弾」は聞き手に、実際に次の行動を起こすように強要しているが、「非難」の場合は聞き手からの認識提示や応答等の反応を要求しており、実際に行動を求めているわけではない。

続いて、矛盾が生じない矛盾非考慮の情報系の文について見る。

(60) (2人で出かけていて)

1A: 今日コンサート行くんやんな? 5時からやっけ?

2B: [6]時からやデ[[一。なんで?

【情報系】

3A: いや、気になっただけ。

(60) では、A は「コンサートが6時から始まる」という情報を聞き手が把握していないことに関して話し手は特に矛盾を感じておらず、B は A が当該情報についてまだ知らないことを前提に発話している。また、疑問型上昇調のデによって、当該場面状況について聞き手がどのように認識しているのかわからず、聞き手が認識を提示するよう求める発話にな

る。すなわち〔反応の要求〕用法である。

加えて、矛盾考慮の情報系の文においては、聞き手が存在しない非対話的場面でも用いることができる（例（61））。

（61）（独り言で）あれー、ペンどこいったー？ な[い]デ[[一。 【情報系】

この場合、「ペンがあるはずなのに見当たらない」という話し手にとっての矛盾が生じている。よって、「ペンがどこにあるかをわかるはずだろう。わからないのか？」と、当該場面状況に対して話し手自身がどのような認識を持っているのかわからず、話し手自身に自己の認識提示等の反応を求める〔反応の要求〕を行っているのである。よって、結果的に「自問」する役割が強いものとしてデが使用されている。

続いて、行為系の文につく疑問型上昇調のデについて見る。情報系の文と同様に、行為系の文でもタイミング考慮・非考慮より矛盾考慮・非考慮に重点が置かれる。発話が動作実行のタイミングにあってもなくても同じように疑問型上昇調は使用されるが、話し手にとって場面状況に関する矛盾があるかないかで、役割が異なる。矛盾非考慮の行為系の文では、聞き手の意向の「伺い」としてのはたらきが強く表れる。

（62）（ゴミを出しに行く人が特に決まっておらず）

A：ゴミ出し、私(ら)[行く]デ[[一。 【行為系】

B：a. えー、そなんん悪いよ。

b. ほんまに？ ありがとう。

特に（62）のように、話し手にとって特に矛盾は生じていない状況における、話し手のみ、もしくは話し手と第三者の行為の実行に関する文では、疑問型上昇調のデは聞き手がどのような反応をするかを伺うようなはたらきをする。「自分（たち）がゴミを出しに行く」ことについて聞き手がどのように認識するか不審がりつつ反応を要求する用法から派生するのが「伺い」と考えられる。よって、A の発話へ B は許可を意味するような返答を行うという一連の会話が成立するのである。また、「ゴミを出しに行く」のが発話時点であっても発話時点でない（未来の）場合であっても、（62）は成立する。

一方、聞き手との行為の実行に関する文では、矛盾非考慮の場合には使用されにくいが矛盾考慮の場合には使用される。

（63）（2人でゴミを出しに行くことが決定している場合）

A：いつまで違うことしてんねんな。ゴミ出し[行く]デ[[一。 【行為系】

B：ごめんどめんど、そうやったな。今行く！

聞き手と共同で行う行為の実行を事前に決定していたにも関わらず聞き手がそれを認識していないような行動をしており、話し手にとってその場面状況に矛盾が生じている。このように、矛盾考慮の場合には聞き手が関わらない行為の実行に関する文でも使用される。

（64）（ゴミを出しに行くのはAだと決まっているが、Bが行こうとしている場合）

A：ゴミ出し、私(ら)[行く]デ[[一。 【行為系】

B：あ、そうなん。知らなかったわ。

（63）（64）ともに、「伺う」というよりは、命題内容を知っていたら起こさないであろう聞き手の行動を認知した話し手が、「命題内容についてきちんと認識していないのはなぜ

か。」と不審を示しつつ認識提示を要求する、聞き手を非難する「無知の非難」としての役割が強く表れている。なお、矛盾考慮かつ行為系の文においては、実行者の違いやタイミング考慮・非考慮問わず「無知の非難」という役割が強くあらわれる（例（65）（66））。

（65）（明日2人でゴミを出しに行くことが決定しているが、Bが何も準備をしていない場合）

A：明日一緒にゴミ出し[行く]デ[[一。わかってる？ 【行為系】

B：ごめんごめん、そうやったな。

（66）（明日Aがゴミを出しに行くが決まっているが、今Bが行こうとしている場合）

A：ゴミ出し、明日私(ら)[行く]デ[[一。 【行為系】

B：あ、そうなん。知らなかったわ。

以上をまとめると、疑問型上昇調のデは、話し手にとって自明である命題を伝えつつ、周囲が場面状況に対してどのように認識しているのかわからないという話し手の不審を表明することで、その話し手の認識提示に対する聞き手からの認識提示等の反応を要求する〔反応の要求〕を用法として持ち、特に矛盾考慮の情報系の文・行為系の文では「無知の非難」、非矛盾考慮の行為系の文では「伺い」としての役割が強く表れる。また対話性という観点から見ると、疑問型上昇調のデは、「自問」する形で聞き手不在の非対話的場面（独り言）でも使用可能であることから、強調型上昇調や高接のデより対話性が弱い。

5.2. 無音調のデ

前節で上昇調のデについてまとめてみてきたが、本節では、野間（2011）が記述していない、上昇しない音調である無音調をとるデについて見ていく。

デを含む文が無音調をとる場合は、話し手が聞き手に命題内容を強く伝えたいというよりは「命題内容が話し手にとって自明であるということを表明する」という態度が強く表れる。よって、無音調のデの用法は〔認識の表明〕であるとまとめられる。無音調は、前節で述べた上昇調と同様にももちろん対話的場面でも用いられるが、聞き手が存在していない場面においてどの音調よりも自然に使用される。よって他の音調のデと比べると最も対話性が弱いと言える。

次のような情報系の文では特に、話し手の〔認識の表明〕が強く表れる。

（67）（外を見ていたら雨が降ってきて）雨降って[き]たデ(一)。 【情報系】

（67）は聞き手へのアクションを起こさせようというニュアンスもなく、聞き手が存在していてもしていなくても成り立つ用例であり、非対話的場面（独り言）でも成立する。また「雨が降ってきた」という話し手にとって自明である命題内容に伴って、しみじみと感じている様子などの何らかの感情が表明される場合もある。このような命題内容に伴う感情の発露も含めて〔認識の表明〕用法である。この感情はポジティブなものもネガティブなものも表明される。（67）において、話し手が雨が降ってくることを望んでいたのであれば「喜び」等が、望んでいないのであれば「悲しみ・嫌悪」等の感情が表明される。

また情報系の文では、矛盾考慮・矛盾非考慮問わず無音調のデは使用可能である。

（68）（天気予報によって雨が降ることを知っており、その通りに雨が降ってきて）

雨降って[き]たデ(一)。

【情報系】

(69) (天気予報で今日は晴れだとされていたにも関わらず雨が降ってきて)

雨降って[き]たデ(一)。

【情報系】

(68) のように話し手にとって矛盾が生じていない場面でも、(69) のように話し手にとって矛盾が生じている場面でも無音調のデは使用可能である。そして矛盾考慮・非考慮でも無音調のデの話し手の認識を表明するというはたらきは変わらず、「雨が降ってきた」という命題が話し手にとって自明であるという〔認識の表明〕が行われている。

一方、聞き手が確実に存在する場面ではどのようなはたらきが見られるのかについて次の例を挙げる。

(70) 1A: 今日、あの子コンサート行くんやんな? 5時からやっけ?

2B: [6]時かららしいデ(一)。めっちゃ楽しみにしてたわ。 【情報系】

3A: へー、そうなんや。うらやましいなー。

(70) のように聞き手が確実に存在する対話的場面において無音調のデを使用する場合は、「コンサートが6時から始まる」という命題内容に対しての聞き手の反応を伺うようなはたらきは見られず、「あの子が楽しそうにしていた」と発展した命題についての発話が続く。このような(67)(70)を見てもわかるように、無音調のデは、特に命題内容への聞き手からの反応や応答を強く期待しておらず、単に話し手が自身の認識を表明しているに過ぎないのである。

続いて、行為系の文につく無音調のデについて見る。行為系の文では、「話し手にとって自明である行為の実行」に関しての〔認識の表明〕をする用法から派生して、行為の実行に関する決定事項として「宣言・通告」する役割が強く表れる。

(71) (A がゴミを出しに行くに事前が決まっている場面)

1A: 今日、私、ゴミ出しに行く時間ないかも。

2B: 大丈夫大丈夫。私(ら)が[行く]デ(一)。 【行為系】

3A: ごめんな、願いますわ。

話し手自身もしくは話し手と第三者の行為の実行に関する行為系の文であり、矛盾非考慮・タイミング非考慮である(71)における無音調のデは、話し手にとっては決定事項である「私(たち)がゴミを出しに行く」という行為を実行する、と「宣言・通告」しているのである。

また、聞き手と共同で行う行為の実行に関する文であり、矛盾非考慮・タイミング考慮である(72)の1Aでは、ともに行う行為を実行しようと聞き手を「勧誘」するのではなく、話し手自身が「私もゴミを出しに行く」という「宣言・通告」の役割が強く表れている。

(72) (1人で出しに行くには多そうな量のゴミを見て)

→ 1A: 一緒にゴミ出し[行く]デ(一)。 【行為系】

2B: これぐらい、一人で行けるよ。

3A: 2人で行った方が早いやん。ほら[行く]デ(一)。 【行為系】

続く2Bの断りを意味する発話が行われても、3Aにとっては自身の行動は既に決まっており、あとはBの同意を得るだけという状況となっている。その同意を得るために、「勧誘」

としての役割が強い強調型上昇調のデを最後に使用しているのである。(71) (72) とともに、無音調のデに続く返答がどうであっても、話し手は当該行為の実行を決定しており聞き手の反応を考慮していない。また、情報系の文と同様に行為系の文が矛盾考慮・非考慮どちらであっても、さらにタイミング考慮・非考慮どちらであっても無音調のデは使用される。次掲は矛盾考慮におけるタイミング考慮・非考慮の例である。

(73) (明日2人でゴミを出しに行くことが決定しているが、聞き手が今1人で行こうとしていて)

今行かんでいいよ。明日一緒にゴミ出し[行く]デ(一)。 【行為系】

(74) (2人でゴミを出しに行く決めていたが聞き手が他のことをしていて)

何やってんの？ ほら、ゴミ出し[行く]デ(一) 【行為系】

(73) (74) は、聞き手にとっても自明であるべき命題内容を聞き手がきちんと把握していないような行動を起こしていることから、矛盾考慮の行為系の文である。加えて (73) はタイミング非考慮の場合であり、(74) はタイミング考慮の場合である。このような矛盾考慮におけるタイミング考慮・非考慮の行為系の文でも、矛盾非考慮の行為系の文と同様に、無音調のデは「宣言・通告」する役割を担っている。

以上のように、デを含む文が無音調をとる場合は〔認識の表明〕を用法としてもっており、特に行為系の文では「宣言・通告」としての役割が強く表れる。また、対話性という観点から見ると、常に聞き手からの反応を期待していないことから、他の音調と比べると最も対話性が弱いと言える。

5.3. 平坦調のデ

本稿はデが上昇調をとるかとならないかに論の重点を置いており、平坦調のデについて深く記述するには至っていないが、現段階で考えられる当該音調の用法について見ていく。

郡 (2020) の分類によると、平坦調は強調型上昇調の変種であり、ほぼ平らな音調であるとされている。このことから、デの平坦調と強調型上昇調の用法はほとんど変わらない。しかし平坦調のデは、強調型上昇調のイントネーションを伴うよりも音圧的にやや柔らかい響きになることも相まって、聞き手への直接的な伝達というよりは間接的な伝達になる。平坦調のデでは複数人の聞き手に向けた情報伝達の場面を想定するのが自然と感じられるが、これも、この「間接的な伝達」と関係すると考えられる。

また、強調型上昇調のデが聞き手に〔認識変更の要求〕を行うことで、聞き手に何らかのアクションを起こさせようとするのに対して、平坦調のデは、命題内容を伝達することで複数人の聞き手がアクションを起こすのを期待してはいるが、実際に聞き手全員がアクションを起こすよう強く働きかけるわけではない。つまり、平坦調のデは「情報としてひとまず伝えておく（が、これを受けて聞き手がどのように行動するかは任意である）」というニュアンスがやや強くなることから、〔認識すべき情報の提示〕という用法を持つとまとめられる。

(75) (外を見ていたら雨が降ってきた。家の中にいる人に向かって)

雨降って[き]たデ (I) 一。 【情報系】

(76) ゴミ出し[行く]デ (I) ー。

【行為系】

(75) (76) とともに、複数人の相手を想定して発話される例である。文としては強調型上昇調のものと特に変わらない。しかし、このように複数人に向かって発話することで命題内容が間接的に伝達され、指向性が弱まる。また、聞き手全員に何らかのアクションを起こさせるというまでには至りづらく、命題内容を伝達しつつ聞き手へのアクションを期待する程度に留まっているのではないだろうか。

また上記例のように、デが平坦調をとる場面や状況も強調型上昇調と一致することから、平坦調のデが使用されにくい場合も一致し、非対話的場面では使用されない（例 (77)）。

(77) あれー、ペンどこいったー？ ??ないデ (I) ー。

【情報系】

6. 文末詞デの文法的意味

本節では、文末詞デの文法的意味や機能について考察する。まず 6.1 節において、ここまでみてきたイントネーションごとのデの用法とイントネーションの関係を整理し、デの文法的意味について考える。これをふまえ、続く 6.2 節にて、野間（2011）がまとめた「デが使用されない場合」について再考する。

6.1. 文末詞デの意味とイントネーション

前節で文末詞デの持つ中心的なはたらきや各イントネーションにおけるデの用法について記述してきた。それについてまとめたものが次掲の表 1 である。

表 1 から、上昇調をとるデ (①～④) は、聞き手に行動を起こさせたり反応を要求したりする用法を持っているとまとめられる。基本的に聞き手に向けた発話で使用されることが多く、対話性が強い。

表 1 イントネーション別にみたデの用法や役割

デのタイプ	デの用法	対話性	伝達される態度・効果		矛盾 考慮	タイミング 考慮
			情報系の文	行為系の文		
①強調型上昇調のデ	認識変更の要求	◎	知らせ	※ ⁽⁸⁾ 勧誘	非	非 考
②平坦調のデ	認識すべき情報の提示	◎	知らせ	勧誘	非	非 考
③高接のデ	認識変更の強要	◎	無知の糾弾		考	—
④疑問型上昇調のデ	反応の要求	○	反応要求	伺い	非	—
			無知の非難		考	—
⑤無音調のデ	認識の表明	△	認識の表明	宣言・通告	—	—

凡例 ◎○△：対話性の強さ（強い順）、非：（矛盾やタイミングの）非考慮、
考：（矛盾やタイミングの）考慮、—：（矛盾やタイミングの）考慮・非考慮を問わない

- 8) タイミング非考慮の行為系の文が、聞き手が関わらない行為の実行に関する場合は情報系と同様に「知らせ」の役割が強くなる。一方、聞き手が関わる場合は「勧誘」の役割が強くなる。平坦調のデにおいても同様である。

ここで、野間（2011）がまとめた文末詞デの文法的意味を再掲する。

（78）デは、

- a. 当該命題の内容が話し手にとって「自明」のことであり、
- b. それは聞き手が認識すべきものである

ということを表す形式である。

（（4）再掲、野間 2011: 32）

野間はデの文法的意味（78b）について、聞き手からの反応があることを前提とした上で聞き手に情報を伝達するのがデの特徴であると述べている。文末イントネーションからデの用法を分析した本稿の立場からみると、これは、上昇調のデの用法と概ね一致するが、無音調のデの場合は、相対的に対話性が弱いこと、聞き手の反応を強くは期待していないことから、一致しない部分が多い。野間の記述における「b. それは聞き手が認識すべきものである」というデの文法的意味は、デが、上昇調のイントネーションを伴った場合に生じるものということができるだろう。

文末イントネーションの用法をまとめた郡（2020）によると、強調型上昇調の用法は「わかってほしいという気持ちを込める」、疑問型上昇調の用法は「答えを求める・反応を求める」とされている。これをふまえると、野間（2011）におけるデの基本的な機能「聞き手が認識すべき（と話し手が思っている）情報を聞き手に届ける」（p.36）や、本稿における強調型上昇調のデの〔認識変更の要求〕用法や高接のデの〔認識変更の強要〕用法、平坦調のデの〔認識すべき情報の提示〕用法は、郡における強調型上昇調の「わかってほしいという気持ちを込める」というはたらきがデに被さったものだと言える。また、聞き手からの反応を前提とする野間のデや、本稿における疑問型上昇調のデの〔反応の要求〕用法は、郡のいう疑問型上昇調の「答えを求める・反応を求める」はたらきがデに被さったものだと言える。このような有標のイントネーションが被さっていない無音調のデがもつのは〔認識の表明〕用法であり、これこそが文末詞デの中心的な機能と考えられる。無音調のデは、話し手の認識を表明はするものの、聞き手からの反応を強く期待してはおらず、話し手の認識を発信することを主な目的としている。文末詞デそのものがもつ文法的意味は、次のようにまとめられる。

（79）文末詞デは「話し手にとって命題が自明であることを述べる」ために使用される形式である。

6.2. 文末詞デが使用されない場合

前節で明らかになった文末詞デの意味にもとづいて、野間（2011）におけるデが使用されない場合についても再整理する。野間は次の3つにおいてデが使用できないとしている。

- ①独り言
- ②話し手がある場で考えたことや決めたこと
- ③ナラティブにおける状況説明

①については、5節でも述べたように、独り言では使用されないというのは上昇調イントネーションをとる場合のデについてであって、話し手の認識を表明する無音調のデであれ

ば独り言でも自然に使用される。よって、①をデが使えない場合とするのは適切でないと言える。

②に関しては、「思い出したり考えなおしたりする必要がある」場合（5.1 節（42）（43）を参照）、たしかにデは使用されにくい。また野間の指摘するとおり、（80）のような反射的な発話でも使用されにくい。

（80）（扉に足をぶつけた瞬間）痛い {〇／??デ} ！

しかし、話し手がある場で感じたり考えたりする場合でも、デが使用されることがある。

（81）（電源を押してもテレビがつかなかったため試行錯誤したが、テレビがつかず）
このテレビ[壊れてん]デ(一)。

（81）は、電源を押してもテレビがつかなかったため、リモコンの電池を替えたり配線を調整したりするなどの試行錯誤をしたが結局つかなかったその場での発話であり、無音調のデが使用されている。このような発話が存在することをふまえると、野間の「②話し手がその場で考えたことや決めたこと」では、不十分だと考えられる。前節で、文末詞デは「話し手にとって命題が自明であることを述べる」ために使用される形式である、と述べた。これをふまえると、（81）におけるデは、試行錯誤することによって、話し手にとって「テレビが壊れている」という命題が自明になったことを示している。すなわち「命題内容が話し手にとって自明である」という認識を表明したい場面においては、命題を認識したその場であってもデが使用可能であると言える。したがって②は厳密には、「話し手にとって自明だと表明する必要性を感じない命題を述べる場合」ということになるだろう。

最後に③について、野間はこの場合にデが使用されない理由として、聞き手との共有知識や共有体験をつくるために話し手がターンを維持して話を続けようとしているからだと説明している。また、デを使用するとターンが維持できないのは、聞き手からの反応を前提としているからだとも説明している。本稿ではナラティブにおけるデの使用についてはここまで触れてこなかったが、③のような場合にデが使用できないのは、ターンの維持を妨げるからではなく、聞き手との共有知識や共有体験をつくるためには状況説明に客観性を持たせなければならないからだと筆者は考える。デは自己の認識を表明するという主観性の強い性格を持つため、「ナラティブにおける状況説明」だけでなく、客観性を持たせなければいけない状況説明を行う場面では使用されないのである。たとえば次例のように、口論において相手に責められ、それに対して反論をする場面でもデは使用されない。

（82）A：え、そんなんも知らんの？

B：いや、知ってる {シ／ワ／よ／??デ}。

（82）は聞き手へ認識の変更を要求しているように見えるにも関わらずデが使用されない。これは、やはり話し手が状況説明に徹しているからだと考えられる。この場面において話し手は反駁の意思を表しており、相手の認識を覆すために、自分が真だと考えることがらについて、それが誰にとっても真だと納得させられるように伝える必要がある。ここで話し手の認識を述べるデを使用すると、単に自分にとって明らかであると述べるにとどまってしまう。このような観察から、客観的な状況説明を行う場合にはデは使用されないとまとめられるだろう。

以上より、デが使用されないケースから見ても、文末詞デは「話し手にとって命題が自明であるということを述べる」ために使用される形式であると結論づけることができる。

7. まとめと今後の課題

以上、大阪方言における文末詞デの形態的特徴やイントネーションごとの用法について記述してきた。それをまとめると次のようになる。

【形態的特徴】

- ・ デは動詞・形容詞・形容動詞・名詞・準体助詞・ノダ相当形式・感動詞「ありがとう」「ごめん」に接続可能である。ただし名詞、形容動詞、準体助詞、感動詞に接続する際は、コピュラのヤを介する。
- ・ デは基本的には平叙文にしか接続しない。
- ・ デは他の文末詞とは共起しない。また敬体の「です」には後接不可だが、「ます」には後接可能である。

【文法的意味と各音調における用法】

- I) デは「話し手にとって命題が自明であることを述べる」ために使用される形式である。
- II) デは基本的に低接のアクセントをもち、強調型上昇調・疑問型上昇調・無音調・平坦調の4つのイントネーションをとる。しかし例外的に高接のアクセントをとるデも存在する。これらを上昇調（強調型上昇調および平坦調・高接・疑問型上昇調）と無音調とに大別すると、上昇調のデは聞き手からの反応を前提としており、対話性が強い。一方無音調のデは聞き手からの反応を強く期待しておらず、対話性が弱い。
- III) 強調型上昇調・平坦調・高接のデは、聞き手へ認識を変更するようはたらきかける用法を持ち、情報を知らせたり勧誘・挑発したりする場面で用いられる。疑問型上昇調のデは、聞き手に場面状況への認識提示などの反応を求める用法を持ち、非難したり反応を伺ったりする場面で用いられる。一方無音調のデは命題を話し手自身の認識として表明する用法を持つ。
- IV) 上昇調は音調自体に聞き手からの反応を求める効果があることから、音調による影響を持たない無音調をとるデが持つ用法がデの文法的意味である。

以上のように、本稿では大阪方言における文末詞デの記述に文末イントネーションの観点を取り入れ、イントネーションごとの用法からデのもつ文法的意味を明らかにすることを試みた。しかし依然として課題は残っている。丁寧体「ます・です」における後接可／不可の違いや、平坦調のデの用法について、本稿では詳細な記述をするに至らなかった。また、2.1節でも触れたように、デはゾ（ド）と同列に語られることも多く、ゾとの対照によってより緻密な記述が行えるとも考えられる。ほかにも標準語の「よ」に当たるとされる当該方言の他の文末詞（ワ・ヤ等）とも対比させつつ、より体系的に大阪方言の文末詞を整理することが今後の課題である。

【参考文献】

- 飯豊穀一・日野資純・佐藤亮一編（1998）『講座方言学 7：近畿地方の方言』第二版，pp.55-86，国書刊行会.
- 井上優（1993）「発話における「タイミング考慮」と「矛盾考慮」：命令文・依頼文を例に」『研究報告集』14，pp.333-360，国立国語研究所.
- 榎垣実編（1962）『近畿方言の総合的研究』三省堂.
- 沖裕子（2017）「談話論からみた松本方言の判断終助詞と通知終助詞」日本方言研究会編『方言の研究』3，pp.217-238，ひつじ書房.
- 上林葵（2020）「関西方言における終助詞ゾの機能」『日本語学会 2020 年度秋季大会発表原稿集』，pp.17-24，日本語学会.
- 郡史郎編（1997）『日本のことばシリーズ 27：大阪府のことば』明治書院.
- 郡史郎（2015）「日本語の文末イントネーションの種類と名称の再検討」『言語文化研究』41，pp.85-107，大阪大学大学院言語文化研究科.
- 郡史郎（2018）「終助詞類のアクセントとイントネーション：「よ」「か」「の」「な」「でしょ（う）」「じゃない」、とびはね音調の「ない」」『言語文化共同研究プロジェクト』2017，pp.13-26，大阪大学大学院言語文化研究科.
- 郡史郎（2020）『日本語のイントネーション：しくみと音読・朗読への応用』大修館書店.
- 国立国語研究所編（1999）『方言文法全国地図第4集：表現法編1』財務省印刷局.
- 尚学図書編（1989）『日本方言大辞典』下巻，小学館.
- 轟木靖子（2008）「東京語の終助詞の音調と機能の対応について：内省による考察」『音声言語』6，pp.5-28，近畿音声言語研究会.
- 轟木靖子（2016）「終助詞の音調の記述方法について」『日本語学』35-11，pp.12-23，明治書院.
- 日本国語大辞典第二版編集委員会ほか編（2001）『日本国語大辞典』8，第二版，小学館.
- 日本語学会編（2018）『日本語学大辞典』東京堂出版.
- 日本語記述文法研究会編（2003）『現代日本語文法 4：第8部モダリティ』くろしお出版
- 野間純平（2011）「大阪方言の文末詞デとワ」『阪大社会言語学研究ノート』9，pp.30-45，大阪大学大学院文学研究科社会言語学研究室.
- 藤原与一（1949）『日本語方言文法の研究』岩波書店.
- 藤原与一（1972）「方言文末詞（文末助詞）の研究」『広島大学文学部紀要』31(特輯 2)，pp.1-95，広島大学文学部.
- 牧村史陽編（2004）『新版大阪ことば事典』講談社.
- 増井金典（2018）『関西ことば辞典』ミネルヴァ書房.

みなみ さき（大阪大学卒業生）